

できる喜びを味わい、力いっぱい運動する児童の育成

福島市立平野小学校 教諭 廣居 亮

1 研究の趣旨

体育科では、指導内容の明確化・体系化を図り、系統性をふまえた弾力的な指導を行い、児童が生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を身に付けることをめざしてきた。しかしながら、依然として「運動する子としない子の二極化」が進んでおり、「体力低下の傾向は深刻」という課題が指摘されている。こうした現状から、「課題の発見と解決に向けた主体的・協働的な学び」をもとに、グループ活動や話し合いなどの学習活動を介在させて、思考力や表現力をより活性化する学習が必要である。体育科の授業であれば、自らの課題解決に向けて、動きを見合い、仲間と教え合い、運動の方法を工夫して、主体的・協働的に追究する学習を進めていくことが求められる。

そこで、研究主題にせまるため、以下に述べるような仮説を設定し、研究を進めた。

体育科の学習において、「系統性を踏まえた指導計画の作成」「主体的・協働的な学習を取り入れた学習の展開」「個の支援に生きる評価の工夫」の3つの視点から授業実践をしていけば「できる喜びを味わい、力いっぱい運動する児童」をはぐくむことができるであろう。

2 研究の概要

- (1) 系統性をふまえた指導計画の作成
 - ① 年間指導計画の作成
 - ② 学年の研究構想の作成
 - ③ 低・中・高2年間の単元指導計画の作成
- (2) 主体的・協働的な学習を取り入れた学習の展開
 - ① ひらのっ子運動（運動身体づくりプログラム・感覚づくりの運動）
 - ② 追究意欲を高める課題の設定（動きを見つける）
 - ③ 課題を追究し、学び合う場の設定（動きを見合い、教え合う）
- (3) 個の支援に生きる評価の工夫
 - ① 学習を振り返り、評価する場の設定（動きを振り返る、評価する）
 - ② 評価規準に照らして個を評価する
- (4) 検証方法
 - ① 学年組織による授業のPDCA
 - ② 授業のバトン

3 成果と今後の課題

- (1) 成果
 - ① 2年間の単元指導計画の作成の効果
 - ② 学習過程モデルの有効性
- (2) 課題
 - ① 児童の課題に対する教師の適切な言葉かけや支援について